
I Z I M E

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INIME

【著者名】

N-コード

N7928D

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

親友をいじめにより失った晶、そんな彼の前に現れたのはいじめられている同級生だった。守るべきものを守るために、晶はいじめに立ち向かった。何だかんだでかつこいい事言つてますがバトル小説になりそうです・・・。

勝負の「プロローグ」（前書き）

グロイ暴力シーンはありません。
かといってドロドロな物語でもありません。
むしろコメディーが入っています。
しかしいじめがテーマなので真剣に書かせてもらいます。

勝負の「プロローグ」

いじめ

集団の中で疎外された者にする仕打ち。

それは罪であるはずなのに、

だれも、罰を与えない。

『間違つてゐよな？ 理不尽だよな？』

あいつは、その言葉を俺に残した。

三上 裕は死んだ。

俺に、手紙を残して。

あいつは、いじめにあつていた。
いじめにあつている奴を助けて。

いじことしたのに、現実はこれか？

俺が唯一できたのは、裕の友であることだけ。

あいつと話して、笑つて、一緒にいて。

でも、あいつは、逝ってしまった。

中学時代、不良生徒としてみられ、結局、良い高校なんか進めず悪

い高校へ、

明るい未来なんぞ望めない道をたどるのに、三城晶は微塵も悲観していいない。

所詮極道一家の三男、家は長男が継ぎ、次男がサポート、三男はいてくれれば良い存在。

必要とされない存在だが、いなくてはいけない。

よく分からぬ矛盾のさなか、晶には親友がいた。

もひ、今は亡き存在ではあるが……。

別に不良とはいえ、触法行為は一切していない。
窃盗どころか万引き、喧嘩も起こしていない。
無断欠席と授業態度が悪いだけ、そんなものだ。
たゞ少し長身であるのと、武道をしていた。

本気で喧嘩すれば、相手を殺しかねない。

それは体の中の血で分かる。

自分の力の恐ろしさは・・・。

都内でも有名な低レベル高校、「白河高等学校」

中学時代、まともに勉学を行わなかつた生徒を無理にでも勉強させる国立高校である。

日々心配されるフリーター、ニートの増加を防ぐのが目的のようだが、

実現など出来ているのかどうか、

ただいじめる者といじめられる者を終結させ、更なるいじめられる環境を造っているだけだ

それが現実だ。

そんな高校へ晶は入学した。

と言つても、入学式は行かず、既に三週間の時が過ぎても晶は高校へ行く気がしなかった。

只単、入学した意識がなかつただけである、だが、今日は違つた。

いつも通りの平凡な日の中後、朝から趣味の書初めをしていた晶は午後は庭で剣道をすることにした。

極道であれ、和を知り道を極めよ、父の口癖であり、この組の訓である。

暇を弄ぶ晶にとつては充実した時間でもあつた。

竹刀を握る、姿勢を正し振り上げる。

真っ直ぐに振る下ろすがその時腕は相手の面を狙う如く伸ばす。足は常に右足が前、軽くかかとを上げ常に動ける姿勢を、精神を集中させ気合を放つ。

ふと視線を感じた。

即座に振り返ると、誰かが塙を越えて覗き込んでいる。

黒髪の短髪、一見男に見える、だが大人しそうな幼い感じのする少年だ。

どうやら氣づかれたと感じたようだ、慌てていると塙の向こうに倒れていった。

落ちた音とともに悲鳴が聞こえる。

「さ、佐東純です」

先程の少年は白河高校の生徒、つまり晶の同級生。

「なんのよつだよ

晶は門の前で用件を聞く。

「三城君三週間も学校来てないから、やの、お知らせの紙とかを届けに来た

「ああ、もう学校始まつてるのか

拍子抜けのする返答。

「え、自覚してなかつた?」

「どうせ行く意味もないような学校だろ

「うと・・・・そうだね」

暗くなる純、変だと思った晶はふと脳裏に裕の姿が見えた。
ビートなく似てこる姿に晶はドキッとした。

「お前、いじめられてるのか?」

ふと吐た言葉に、純は体を振るわせた。

「な、なに言つてゐんですか、じゃあ、渡しましたからねー。」

そう言って、純は走り去つた。

晶の心の中で、ある思いが生まれた。

裕が言つた、『間違つてる』『いじめ』『罰』

誰かが苦しんでる、それに間違つなどない。

「守るべきなんだろな、あいつを、だろ? 裕・・・・

無意味な生活ではなく、不必要的存在の撤回のために、

俺こは、すべき事がある。

勝負一「弱者」

翌日

「若！学校ですか？お車用意しますか？」

晶の付き人、伊賀狭五郎。

組の幹部で信頼の厚いがにも極道ですといった男だ。なぜかいつも黒いサングラスをしてくる。

「いや、いい、どこで白河高校はどうだ？」

「へい、・・・え？」

「え、じゃねえよ、場所だ場所」

「知らないんですか？」

「知つてたら聞くか！早く言え！」

玄関でそんなやり取りをしていた。

「おう晶！学校か」

次男 平助^{へいすけ}がのんびりやつてきた。

「兄さん、丁度よかつた、兄さんの行つてた白河高校つてどーだ？」

「あ？しらね」

「おい！一応母校だろ！？」

「思い出すなあ、学校占拠したとき」

「いつてきまーす」

やばい話を無視して晶は家を出た。

丁度門の前ではお手伝いの銀谷さんが掃除をしていた。

「晶？早いじゃないか学校に行くの」

「銀さん、もう9時過ぎだから遅刻だよ」

「違う違う、平助は学校に行つたの2年生の後期からだからわあアホの兄を基準にして欲しくないと思った晶だつた。

「銀さん、白河高校つてどー？」

「ふあつふあつふあ、兄弟だね～、平助もそんな事言つてたよ」

「で？ 行き方は？」

「そ、うそつ、白河高校、何でも合併したそ、うだ、と、えへへ 確かへへ
？」

「いいから銀さん行き方は？」

「え？ 何？ あたしゃ聞こえないよ？」

「こんのババア

「冗談だよ、ほれ、地図だよ」

地図かよ。

笑いながら銀さんは晶を送った。

「おいおい、変なやり取りのせいでもう10時かよ」

地図を片手に急ぐ晶、ふと、前方を見ると同じ制服の少女がいた。

「あ？ 遅刻組？ さては不良か？」

不良はお前もなんだが、取りあえず付いて行けば直に付くだりうと
後を付ける晶。

前方の少女は何かを呟きながら歩いていた。

そうかと思えば走り出す、だが急に止まる。その場に倒れこむ、
で、また立ち上がる。

いつそのこと救急車を呼ばうとした晶は意を決して近づいてみた。

「あの～？」

「ああああああ～学校に遅れたら名森さんなもりにまた怒られる。お金も
ピンチだからパシリできなし、どうしよう、・・・休んじゃおう
かな？・・・ダメダメダメ！お母さんが折角の名門校合格だつて
喜んでいたのに・・・くつ、そつよ、我慢しなきや」

「もしもし？ 救急車お願いします」

「まつて！ まつて！ そんな！ 病院はダメお金ないのーーー」

「あ、やっぱいいそうです」

携帯をきる晶。

本当にあせっていたのか息を切らす少女。

少女が晶を見ると驚いた。

「あ、あなたも白雪生なんですか？」
「はい？ なんですって？」

「え？ 今日が初めての登校？」

「そうなんです」

「白河高校なら合併してもうあついませんよ？」

「そのようですね」

「雪城^{ゆきじょう}高校と合併したんですけど・・・知らなことありますね」

「はい、全く知りません」

確かに雪城高校は名門進学校、なんでまたアホの白河高校などと？

「・・・あの～～？」

苦悩する晶に少女が声をかける。

「はい？」

「不良・・・ですか？」

「いえ？ 全然？ 今日は寝坊です」

「ですよね～、優しそうですしね」

内心、こいつバカだと思つていた晶である。

「海京^{かいきょう}亞鹿^{あしき}といこます」

「三城晶です」

「よろしく～」

「・・・のんきに自己紹介している場合じゃなこと思つんですけど」

「え？ ・・・ああああ！ ！ 学校！ ！」

「場所はどこです？」

「この先をずっと行くと川があつてその川を田印に東へ進んで行けばあります」

「じゃ」

走り去る晶、

「え？ え？ ま、まつてください～！」

走っていると歩いている同じ制服の白雪生が見えた。

中にはいかにも柄の悪い不良もいれば、別にそうでもない人もいた。

「んだよ、朝から遅刻者続出だな」

自分もその一人だという自覚はないのだろうか。

晶は溜め息をつきつつすぐ見えた川から東へ曲がった。

見事に校門は開け放しである。

ゆうゆうと校門をくぐりぬけると教師らしき人がいた。

いかにも体育会系の先生である、竹刀を持って説教をしていた。

「いいかお前ら、学校というものはだな、規則を守つて生活する場所であつて」

「うつせーよバカ」

「話しだりい、なに? いい先生気取り?」

「うざい」

ボコボコに言われる教師。

少し睡然としてしまつた晶は止まつてしまつた。

少なくとも教師と言つものは生徒から支持されるもののはずである。それが、今日の前にいるのは平氣で暴言を吐く輩にただ説教しかしていいない。

少なからずショックを受けていた晶に教師が気づいた。

「なんだ、お前も遅刻者か? そこに並べ・・・! -! -! -! -!

晶の制服の名札を見て驚愕する教師、

「み、三城! ? し、失礼しました!」

・・・あ?

なぜか怯える教師、晶は兄の平助を思い出す。

「ど、どうぞ行ってください!」

気分が悪くなつた。

頭が痛い、その原因はほぼ怒りによるものだった。
並んでいた不良たちの顔が晶を見て豹変した。

その顔は怯えている顔だった。

それほどまでの表情を、今晶はしている。

職員室へ向かつた。

入ればなんとなくで場所など分かる。

堂々とプレートまでひっさがっていた。

「失礼します」

そう言つてドアをスライドする。

中では教師たちが忙しそうに動いていた。

かと思えば、窓際に座る暇そうな教師もいた。
すぐに反応したのは眼鏡の女の人の教師だった。

「どうしたの？」

どうやら知らない生徒なのに気づいたようだ。

「え？・・・っと、学年クラスは？」

「1年、クラスは知りません、三城晶です」

「ガタガタッ」

三城という名字に何人かの教師が反応した。

「三城晶君？・・・ちょっと待つてね？」

どうやら俺を知らない、

どうやら雪城高校の教師だと思われる。
成る程、合併したのは本当のようだ。

少ししてビクビクする教師が来た。

「え、えつと、み、三城・・・君だね？」

神経質そうな眼鏡の男。

「き、君は、シ、C組だから」

ドモリ過ぎにも程がある。

聞きたいことは山ほどあるが、どうも聞ける様子ではない。

「誰か案内してくれません？」

その台詞に元白河高校の教師達なら嫌がるはずだ。

案の定伊藤先生という声が聞こえ、

先程の初めて会った女の人の教師、俺を知らない教師が来た。

「どうなってるんですか？」

晶は廊下を歩きながら伊藤先生に聞いた。

「なにが？」

元々マイペースな性格なのだろう、のんびり答える。

「合併なんて、知りませんでした」

「え？ そうなの？ · · · まあ、学校に来ないとね」

後で職員室で俺の兄の武勇伝でも聞けば、こんなに軽く話す事もなるのだろう。

晶はそう思つて少し悲しくなつた。

「なんで、白河と雪城が？」

「どっちも国立だからね、やうひと思えばできつけたみたい」

「そんなに軽くないでしょ」

「そりゃ学力の差があるけど、この学力の差を無くすために合併したそうよ」

「学力の差？ · · · それよりもっと大事なものがあるんじゃないですか？」

「え？」

立ち止まる伊藤先生。

「 · · · 朝、登校中に雪城生を見ました」

「今は白雪生よ」

「 · · · その子、いじめに遭つてますよ」

「 · · · そうね、確かに、貴方の様に雪城生だった人は嫌かも知れ」

「僕は、雪城生じゃない、白河生です」

「あら、そうなの？ · · · いじめられてたの？」

「 · · · いいえ、でも、親友がいじめられていきました」

「 · · · そうなの、 · · 大丈夫！ 先生が守つてあげるか」

「無理ですよ」

伊藤先生の言葉を最後まできかず答える晶。

「・・・本当に守れたんなら、こんな事言いませんよ

どうやら1-Cにたどりついた様だ。

まだなか言いたげな伊藤先生を残して、
そつけないお礼を言つて教室へ晶は入った。

まず入つて驚いたのは、

教室にある見えない境界線だった。

黒板に近い所にいる生徒と後ろに溜まつた生徒、
客観的判別をするならば、黒板側が良い生徒、後ろが悪い生徒、
その中心では、早くもいじめらしき行動が見える。

女子の集団5人と中心にいる女子生徒。

その中心にいる人物を、晶は知っていた。

亜鹿だ。

「ねえ、マジ困つてるからさあ」

「いいじゃん、五千円で許してあげるよ」

「すいません、本当に持つてないんです」

「だからー、親からもえつて言つてるでしょ」

「なに?名森さんの頼み、聞けないの?」

ふと、晶はこの光景を見たことがある気がした。
同じような状態で、

誰かがいじめられていて、

そうだ、裕がいじめられる原因になつた、あの事件の時と、似てい
る。

「だから、本当にないんです」

「あー…つざつたい！いい加減にしろよ海京」

リーダーらしき女が亜鹿を睨んだ。

髪の長い、顔だけは可愛い女子だつた。

「また屋上でリンチにあいたいの？」

リンチ、集団で一人の人間によつてたかつて殴る、蹴るの暴行を加える事。

その台詞に、晶はキレた。

勝負」「制裁」

泣きそうになる亞鹿にまだ恐喝をしてくる集団の方へ進む晶、すぐに女子の一人が晶に気づいた。

「どけ」

あつさり言つ晶。

5人の女子が振り向く、

「あ？ 何？ あんた」

「つーか誰」

無視して亞鹿に近づく、

「俺の席つてどこです？」

「え？ ・・・あ、あの窓際」

「ありがと」

そのまま席へ行こうとする。

「ちょっと待てよ」

あの髪の長い名森が案の定話しかけてきた。

「何だよおまえ、偉そうに」

「そうよーこの学級では名森さんがトップなんだからー。」

「黙れ」

淡々と喋る晶、

「・・・こいつバカだろ、おい、てめえ」

顔を怖くして言い寄る名森、

そして晶は言った。

「黙れって聞こえなかつたか？ 最低のトップさんよお」

名森が更に険しい顔つきになつた。

「おい、男子、気に入らないからやつて」

それだけ言つて亞鹿の方へ行く。

そして後ろのほうにいた男子がこっちに寄つてきた。

だが晶は男子のほうには見向きもしないで、

また亜鹿にいじめを続行しようとする名森を睨んだ。

「・・・はつ、とんだブスがいたもんだ」

わざと聞こえるように囁ひ晶、

名森が晶を睨む、

「なにやつてゐる男子ー。わつせじボロセよー。」

一人の男子が晶の肩を掴んだ。

「お前いい加減にしろよ」

金髪に染めてタバコをくわえている。

「お前臭い、近寄るな」

晶はその手を払いのけた。

「なんだこいつ、殺す」

確實に怒っているそいつを晶は今だ無視する。
とつとう襟首を掴んで席から立たせる。

「てめえ!」

「タバコくせえって言つてるだろ」

そう言つて相手のタバコを掴みそいつの手に火を押し付けた。

「あつ!ー」

手を離す相手。

「てめえ!」

「なんだよ?お前が喋つてタバコ手に落としたんだろ?」

「はあ!ー?」

「俺は知らん、何もしてねえ」

いよいよ不良どもが殺氣立つてきた。
だが落ち着いている晶。

一人が殴りかかってきた、しかし、

「おい!なにやつてゐるお前!ー。」

教師が入ってきた。

「授業を始める、席に着け！」

さすがに席に着く不良、晶は軽く笑つてやつた。

授業はまあそれなりだった。

数学で教科書もノートもあるが、大体は家の家庭教師が教えているのでわからないことはない。

それより周りの状況を見た。

真剣に授業を受けるものがいる、元雪城生だろう。

変わつて不真面目なのは白河生、なんとも簡単に見分けるほど

差だ。

そしてもう一つ、純が気になる。

同じクラスだと思われるが、どうも見当たらぬ。
空いた席は3つ、休んでいる可能性が高かつた。

とりあえず授業は進む、

後ろが雑談でうるさかつたが、

「なあ、次の放課、あいつシメよつぜ」

「だな、うぜえよあいつ」

「なあ、ジュンも一緒にボ「そつぜ」

「ああ、金持つてこさせてな」

バカのお陰でヒソヒソ話がはつきり聞こえる。

「場所は屋上で」

屋上か・・・

晶は不適に笑つた。

授業が終わつて15分の休憩、

先生が去つてからすぐ不良が言い寄つてきた。

「こじょ

「行つてやるよ」

晶の反応が気に食わないのか、舌打ちした。

その間にどうも他のクラスからも応援を呼んでいるようだ。

屋上へ上がる前に10人を超えた。

さらに屋上に入ればもう10人ほど不良がいた。

「なんだ～？」

「新しいカモか？」

「今日は3人だぜ」

そう言えばジュンも呼ぶとか言ってたな、

そう思い出していた晶の田に、思った通り、佐東純が連れてこられていた。

更に亜鹿まで、

よく見れば野次馬なのか名森たちがいる。

屋上の中央に立たされる晶と純と亜鹿、

「やつぱいじめられてたか」

「あ、晶君でしたっけ？ そう言つあなたも危ないでしょ？」

「（）みんなさいごめんなさい、わわわわ、私のせいです」

亜鹿はさつきから晶に謝っている。

とりあえず晶は相手の人数を見る。

20人、丁度いい、

「お前ら、下がつてろ」

「え？」

「はい？」

授業まで10分ほど、間に合うな。

晶は笑いながら不良たちを睨む。

「かかつてこいよ」

あのタバコの金髪が殴りかかつってきた。
完璧に見切れる。

そのまま足を振り上げ金髪の顎を蹴り上げた。

タバコが飛ぶ。

金髪ものけぞり吹つ飛んだ。

続けて何人も来る。

どうつて事はない、確実に拳で殴つていった。手の抜き方はいまいち知らない、

一発で氣絶する奴もいる。

とりあえず、時間内に不良は全員倒れた。

野次馬の名森が恐怖の顔をこちらに向ける。

「大丈夫か？」

後ろにいた純と亜鹿が呆然と立つていて。だが確実に晶を怖がつていて。

ま、無理もないか。

裕は一切暴力に頼らず守つていた。

だが、俺はそう上手くいかない。

「授業おくれつぞ」

それだけ言って屋上を出ようとする。

名森達が何か叫んで走つていった。

それ程怖かったか。

兄ほどの脚光は浴びたくないと思つたが、同じもので注目されそうだ。

晶はなにか空しい気持ちになつて出て行つとした。

「ま・・・ま、まつて」

純の声が聞こえた。

振り返ると、

「・・・・くださいませ」

体が震えている。

よほどビビつてゐるのか、敬語までつけて。

「あ、ありがとうございます……？」

うん、まあ、気持ちは伝わったよ。

少し笑つて、晶は言つた。

「敬語はよせつて」

「し、死んでませんよね？」

「殺さないよ俺は」

「つ、強いんですね」

階段を下りながら3人で話す。

2人とも警戒の糸は解いてくれたのか気楽に話してくれる。

教室へ戻る、

クラスの男子半数がいないのに教師はなんとも思わないようだ。
多分いつもサボっているから気にしなかったのだろう。
まさか屋上での他のクラスの奴らと氣絶しているとは欠片も思っていないだろう。

かくして学校初日は終わった。

「一緒に帰るか」

晶は亜鹿に言つ。

快く亜鹿は同意した。

廊下を通る時も純を見つけて誘つ。

晶がそうしたのはあることを聞くためだった。

「い、今までいじめてきた人……ですか？」

晶の質問はいじめる奴の名前だった。

「え、聞いてどうするんです？」

亜鹿も困った様子で聞く。

「 もつていじめるなと釘を刺すに決まつてんだろ
「 ……それつて、殴るとかの？」

「 まあな

「 いいですよ！そんなことしなくて！」
「 なに言つてんだよ、散々殴られてきたんだろ、やりかえさねえと
「 ダメです！」

2人して反対する、晶は少しイライラしてきた、
「 お前らそんなんだからダメなんだろ？が！殴られても何されても
やりかえさねえならずつとそのままだろ！」

叫んだ晶にまた二人は怯え始めた。

「 ……いいから、せつせといじめてきた奴を」

「 晶君は、友達だから」

亜鹿がせつし言つた。

晶は怪訝な顔をする。

「 晶君は、友達だから、そんな事しなくていいよ
亜鹿は涙目になつてそう言つた。

「 そうですよ、晶君、だから、いいんですよ」

「 ……つたく、とんだお人好しだなお前ら
こんなにいい奴が、いつもいじめに遭うんだな、
そう思つた晶はその不条理に納得できないが、
機嫌の治まつた晶をみて、屈託のない笑顔の一人に、
いつの間にか心は和んだ。

だが、翌朝、学校に来て驚愕した。

勝負三「殺忍三人衆」

『三城晶』ロス！b Y、殺忍三人衆^{さつにん}

屋上から吊るされた巨大な垂れ幕、

甲子園にでも行く高校でしか見られないそんなものが、目の前にある。

真っ赤な明らかに血をイメージしたデザイン、そして周りの極度の怯えよう、

「・・・おいおい」

晶はただただ溜め息しかつけなかつた。

屋上

昨日不良を『テンパン』にしたこの屋上はいつの間にか晶の物となつていた。

利用するのはもちろん3人だけである。

「あ、晶君、さ、ささ殺忍三人衆になにかした？」

亜鹿が声を震わせて聞く、

「いや、そんな奴知らないし何かした覚えもない」

「・・・だとしたら、やっぱ、名森の仕業かな」

純が意外と落ち着いて言つた。

「で、その殺忍三人衆ってなんだ？」

「さ、ささ殺忍三人衆とはですね、小口歩幸、黒染ハツ、虹橋海の

三人の事なんです。それぞれ通称が、不幸、ハ刺し、破壊といわれてまして、恐怖の伝説を打ち立てていると言われているんです、

「いかにもグレそうな名前をつけたもんだなその親達」

「そして、その三人衆の伝説が、小学生から殺忍部隊幹部をしていったとか、平助の右腕だったとか、中学生の時、ヤンキー校で有名な高校を3人で壊滅させたり、でも一番の伝説と言えばやはり、伝説

の喧嘩師と戦つたところでしょ、うか、なんせ生きてますからね」

「し、しし新聞にも載ったあの、けけけ喧嘩師と戦つてい、いい生きているのはあの3人ぐらいですよ」

「・・・なあ、平助つて」

「え？ 平助ですか？ その人は殺忍部隊のリーダーです。喧嘩師の直属の部下で構成された部隊、暗闇で仕事をこなし、常に陰で生きる人達ですが、平助という人は余程名の知れた人物みたいですよ、喧嘩師が唯一目を合わせて話したそうですから」

「・・・もう、これなんの不良漫画つて感じだな。

「つか、ようするに暴走族を小学生からしてましたってだけだろ」「で、ででも小学生から暴走族なんて、普通じゃありませんよ」

「俺の兄貴は平助だが俺は普通だろ」

「「え？」

声をそろえて固まる2人、

「だああ！！ いいから！ その三人衆とやらをぶつ潰せばいいんだろ！」

「落ち着いてくださいよ、簡単に倒せる敵とは思えません」

「なんでだよ？」

「だ、だだだだって、不幸は鎖の使いで、ハ刺しは棒使いだし、破壊は素手で岩を壊すんだよ？ このまま戦つたら・・・晶君・・ヒック・・死んじやうかも・・・」

涙目になる亜鹿、それ以前に物騒なその三人に違う意味で恐怖を感じる晶。

「ここには逃げるか白旗を上げましょ、でないと本当に死ぬかもしれませんよ」

「いや、多分なにしてももう遅いだろ、そんなに血の氣の多い奴等なら

「そりゃ・・・では、僕が親に頼んで百万円用意させます」

「までまで、お前は今回関係ないだろ」

「・・・どじか？」

純が無表情ながら言った。

「……言つたでしょ、あなたは友達です、だから、助けるんです」

「……はあ、でもお前の家に金あんのか?」「知らないんですか?僕の家病院やつてるんですよ?」

「……へ~」

生返事をする晶だった。

「だが、金はいい」

「なぜですか?お金ならありますから」

「そうやつて、金出しても、誰も喜ばねえよ」

「……え?」

「よく考える、金はそんな使いかたしねえよ、金で片付けるのは一瞬だ、また嫌な事はすぐやつてくる」

「……でも」

「……俺が喧嘩で病院送りになつたとき、お前の病院に入れてくれ、ついでに医療費もタダしてくれ、それでいいだろ」「……仕方ないですね」

下校時刻、

今までなんの反応も見せなかつた三人衆が、とうとう動きだした様だ。

話によれば学校全員から恐れられ、嫌つているそうだ。

不良達ですら下にはつきたくないらしい。

要するに3人しか敵がいないと思えばいい、
だが来たのは名森だつた。

「あ、ああああんた、き、ききな!」

完璧にビビりまくつて少し髪の毛が白くなつている。

まあこいつがそもそもその原因なのだろうからパシリにされても仕方

がないだろう。

「てめえが三人衆になにか吹き込んだんだろ」

「そそそそそうだと言つたら?」

「殺す」

「わわ私だけ、じゃないのよ!三学年のトップが私に押し付けて

「あ?なに?あんた学年のトップだったの?」

「そそつそつよーどう!恐れ入つた!?

「お前をここで倒せば俺がトップか」

「…………あああああんたなんて三人衆が倒すんだから!」

「まあ、それは無理だな」

「なによ!何にも武器持つてないくせに」

「木刀」

そう言つてどこからか出した木刀を見せる囁。

「はっ、真剣ならまだ戦えるだろ?けど、そんなんじゃダメね」

体育館まで進む名森、

するとそこで止まった。

「あんた、私の部下になるなら許してあげてもいいわよ?」「どけブス」

「あ~ん~た~ね~、こ~ちは助けてあげよ~つとしてるのに~。いいわよ!ホラ逃げな!」

「あ?なぜ逃げる?その中に三人衆がいるんだり?どけ」

「あーーーもうーーどうせ入つたって死ぬだけよ!借りにしてあげる!だから返してよ、ほら、帰つて」

「……意味の分からんやつだな、とつあえずどけ」

「……」
「のよ」

「あ?」

何か小さな声で呟く名森、

だが聞こえない、

「・・・もういい、好きにすれば」

そう言つて名森はその場を離れた。

「なんだ？本当に変な奴だな」

そつ言い一つも体育館の扉をあける晶。

亜鹿と純には先に帰れと言つておいた、
多分もう家にでも着いているだろう。

俺ははたして帰れるか・・・

体育館は結構広い、その中央にいる三人、
右には晶と同じ位の長身の男手には棒が握られている、左は眼鏡を
かけた鎖を腕に巻いた奴、そして中央にいる背の低い赤に髪を染め
た奴。

「左から不幸、破壊、やつはしか」

「ハ刺しだ！－つて言うかその名で呼ぶな！！！」

「あはははは！やつはしだつてよ！やつはしくん！」

「てめえなんか破壊だらうが！名前ですらねえよ！」

「待てよお前ら、一応決闘前なんだからそれらしい態度取れよ」

「あ～？決闘？そついえばそうだっけ

なんなんだこの謎の空気は、

読めない、全く読めない！ＫＹか！俺はＫＹなのか！！

いきなりの精神的攻撃に思考回路が逆回転してしまった晶はよく分
からない心の叫びをしていた。

「え～っと、晶・・君だけ？どうする？」

「ここで死ぬ？それとも逃がしてあげてもいいよ？」

その台詞とともに破壊は禍々しい黒いオーラと殺氣に冥界の死神が
降り立つた恐怖の場面を連想させる笑みとハ刺しは般若面の鬼が地
獄より這い出てきたかのような血の復讐を思わせる怒りの形相に不
幸は冷徹で人間とは思えない冷めた - 400 の死の世界の極寒を
も凍らす無表情。

それぞれが性格に見合った脅しの顔は恐怖なんかでは現せれない、成る程殺忍だの化け物だと言われる理由は分かつた。

だが、怖いならば晶も負けてはいない。

こつちは生まれが極道だ、暴走族なんて程度の低いものとは違う。

「ほつ、お前らはここで死にたいようだな？」

目は完全にキレて怒っているが口元は笑っている。

そして後ろにあるオーラは真っ赤な血と炎の合わせ塗りだ。

それは地獄の火などとは比べ物にならず閻魔大王ですら恐れるようで、

その血は例え殺しが好きな狂った殺人犯でも正気に戻し恐怖で昇天させるほどで、

また晶の周りにまるで正義の戦士だつたはずが竜の血で不死身となりそれ以来化け物の王としてあらゆるものから恐れられる悲しき運命に狂わされとうとう血迷い殺しに生きる悪の勇者軍団がいるかのように錯覚させる殺気。

もう体育館は化け物の巣窟となっていた。

「おもしろい、やるようだな貴様」

八刺しが棒を軽く回し始めた。

「仕方ない、死なない程度に殺してあげますよ」

不幸も手に巻いていた鎖を解き始めた。

「楽しみだなあ」

破壊は相変わらず笑っている。

晶は木刀を構えた。

勝負四「晶VS殺忍」

ハ刺しの棒が真上から振り下ろされる。

木刀で受け止めて蹴りを入れる。

ハ刺しの腹に入ったようだ。そのまま晶は蹴り飛ばした。

今度は鎖が飛んできた。

不幸の鎖は先のほうに鉄球がついている。

「おわっ！」

頭を下げる鉄球を避ける。

後ろで鉄球が床にぶつかる音がした。

「いい動きしてますね」

不幸の攻撃はまだ続く、鎖を引っ張り鉄球に勢いをつける。

不幸の頭上で鉄球を振り回す。

「あわっ、おっ、っと、ほっ」

合計4回の攻撃を全て避ける。

床には鉄球により穴が開いていた。

「ちよこまかと」

不幸が次の攻撃に入ろうと鎖を操り鉄球を晶へ投げつける。
だがもう晶には見切れるようだ。

鉄球は晶の側を通り過ぎ晶が不幸に近づく。

「なっ！」

「残念だつたな」

木刀を横腹に叩きいれた。

倒れこむ不幸、だが晶はまた動いた。

ハ刺しが棒を振り下ろしたからだ。

間一髪で避けるが次の攻撃が来る。

突きを連続でやってくる。

だが晶は全て避けた。

ハ刺しは横に振り切る。

だが晶の木刀で止められた。

そのまま棒をつかまる。

「くつ！」

すぐに晶は木刀でハ刺しを氣絶させる。

「フウ、後はお前だけだな」

晶が睨む先には、破壊がいた。

「・・・許さない、俺たちを侮辱したうえに一人をひどい目に合わせて・・・絶対許さない！」

「あ？ 先に喧嘩売ったのはそっちだろ？」

「・・・許さない、許さない許さない許さない！－！」

破壊が一気に晶に近づく。

そして晶の腹に一発殴る。

「ぐおっ！！」

すぐに二発目を入れようとしたが晶が破壊の拳を握る。

「え？」

「今のは効いたが、俺を倒すほどじゃないな」

晶が「カツ」と笑った。

破壊はまだあきらめず反対の手で殴ろうとしたが、それも受け止められる。

「俺を殺す事はできなかつたな」

晶が勝ち誇った顔をする。

破壊は力が抜けたようにその場に座り込んだ。

「さて、力の差が分かつたと思うが、お前らなんでオレに喧嘩売つたんだ？」

晶がそう言つと破壊が晶を見上げながら言つた。

「お前が先にケンカ売つてきたんだろ！ 俺達に濡れ衣を着せて！」

「・・・・は？」

「とぼけても無駄だ！ お前が悪いんだろ！」

そこまで言つと今度は黙り込む破壊。

「だから、お前らなんて」

言葉を出そうとして晶は止まつた。

よく見ると破壊が泣いているからだ。

「・・・ヒック・・・」

「・・・え？俺の所為？」

そこへ更にややこしくなる人物が現れた。

突如体育館の扉が開く。

「あ、ああ晶君を殺したらけけ警察を！――」

亜鹿だつた。

「なに？俺たちを知つたのは今日？」

ハ刺しが晶に聞きなおす。

「ああ、あの校舎にかけてあつた派手な垂れ幕でお前たちの存在を知つた」

「おかしいですね、だつたら20人ほどの生徒をボコボコにしたのは？」

不幸が言つたセリフに引っかかる晶。

「おい、20人ほどの生徒つて、不良の集団の事か？」

「ええ、たしか屋上でやられたつて、そして犯人は殺忍である僕達だと言いふらしたのが、晶という人物だと、生徒会から聞いて」

「また、確かにその不良をボコボコにしたのはオレだが、お前らがやつたとは言つてねえぞ？」

「と言う事は、生徒会の情報が嘘であり、君をボコボコにしようという策略だったという事か」

「なうんだ、悪い人じゃないのか？」

破壊がさつきと違つて笑つていつた。

「晶君、殺忍三人衆つて悪い人じゃないみたいだね」

亜鹿がいつの間にか輪に入つていた。

「私、海峡亞鹿！よろしく！」

いきなりの自己紹介、八刺しと不幸は黙つていたが、

「オレ！虹橋うみ！」

破壊だけは自己紹介を返した。

ん？うみ？

「え？うみってこの？」

「そうだよ、よく『かい』って言われるけど、みだからー。」

「そりなんだー、女の子みたーい」

「女だよ？」

「・・・・・」

女だったんだ・・・。

「まあ、自己紹介は後ににしてだ、どうやら俺たちは踊らされていた
ようだな」

八刺しが腕を組みながら言ひ。

「つまり、僕達は戦わなくてもいいと言つ事ですね」

「ま、そういうことか」

晶は不幸の言葉につなづく。

「ま、こっちも早とちりしたようですし、謝ります、すみませんで」

「あー、別に謝る必要なんかねえだろ、いいつて」

「そうですよ！私たち友達になるんですからー！」

「・・・・・」

晶の言葉の後の亞鹿のセリフで固まる一回。

「・・・い、いや、友達つて」

八刺しが苦笑いで言ひ。

「わーい！友達友達！」

破壊はすでに乗り気のようだ。

「・・・ま、こうなつたのもなんかの縁だ、仲間になるか」
晶が笑つていつた。

「なんか不思議だね晶君！」

亜鹿が唐突に口を開く。

「なにが？」

「だつて、晶君のお兄さんの子分だつた三人と友達になるつて、なんだか運命みたい！」

「――え？」

三人がまた固まる。

「あ〜、亜鹿、それ言わないほうがよかつたかも」
苦笑いの晶だつた。

勝負五「生徒会」

殺忍との一件の翌日

「・・・すいですね、命弟にしたんですか」純が静かに感想を述べる。

「いや、まあ仲間だと思ってくれ」

「やうだよ！名前はうみちやんとあむむくことやしゃれー。」

亜鹿が楽しそうに紹介をする。

「よひしへ～」

「おひ、よひしへ」

「よひしくお願ひします」

「まあ、海さんがあみつてのはわかりますが、なぜ歩幸くんはあゆむでハタくんはやしや？」

「漢字的にそれっぽいから」

うん、極端だな。

「さあ！みんなで遊びよ！何して遊ぶ？」

今はまだ笑っているみんな、だが、裏では陰の動きがあるなどとは、誰も知らなかつた。

生徒会

「この白雪高校の生徒会は元白河生と元雪城生が半分ずつで構成されている。」

そして生徒会だけあって、礼儀正しく頭もいい、だが、その裏では不良学生に対しても残虐な仕打ちをしていた、それは学校の秩序を守るといつ名田のいじめであった。

今やこの生徒会は大きな組織として、この学校に君臨しており、教師より権力の強いものとなつてゐる。

生徒会の大まかな構成として、トップが会長、そして副会長。

その下に執行委員が10名いる。その執行委員に一人ずつ付いてい
る書記、合計20名。

更に各委員会の委員長、副委員長、そして行事に必ず付く実行委員
達。

そして一番下に各学級にいるリーダー、彼らは監視員といわれてい
る。

そして、亜鹿と晶の学級の監視員は名森であった。

第一学年生徒会支部室

「名森監視員、三城晶の削除について、報告を」

そう言つたのは執行委員の一人、「荒木志津恵あらきしづえ」

執行委員の中の十人目といわれている。

この十人目、という意味は階級である。番号が若いほど階級は上な
のだ。

「はい、三城晶の無力化の為、殺忍を利用した結果、失敗に終わり
ました、殺忍どもは晶の仲間になつた模様です」

名森がそう言うと、他の学級のリーダーが笑い出す。

「殺忍たちが仲間に？名森監視員、ふざけてるんですか？」

誰かがバカにした言い方でそう言つた。

「三城晶の経歴を調べたところ、兄はある平助と呼ばれる第一級危
険生徒です、その関係から見て、仲間になつたのはおかしくはない
と思います」

名森は落ち着き払つてそう言つた。

バカにした監視員はばつが悪そうに舌打ちをする。

「そうですか、第一級危険生徒の弟ならば、素早い削除が求められ
ますね」

志津恵が眼鏡を指で押し上げて言つた。

「三城晶を削除するため、各監視員の方達はダストメイトに声をか
けてください」

ダストメイト、この学校にいる不良生徒の事。

「名森監視員、あなたは新たな三城晶、削除作戦を考えてくれさい」

「わかりました」

それで今日の話し合いは終わった。

名森まゆ、彼女は元雪城生だ。

だが元々無理して入った進学校、勉強に付いて行けず、いつしか全てを投げ出した。

楽で楽しくやって、それなりに楽しかった。

だが、周りはうるさかつた。

そんな時、学校の合併が起きた、そして、会長直々の指名で、監視員になつた。

気に入らない奴はいじめてもいい、
勉強なんて気にしなくていい、

君は、この学級のトップだ。

そう言られて、なんだかうれしくなつた。

当然の如く好き勝手やれた、そのリーダーシップを買われ学年のトップにもなつた。

肩書きは『第一学年総学級委員長、一学年監視長』

勉強ばかり気にする学園生活から、いきなり薔薇色の学園生活になつた。

だが、今それが危うい。

三城晶の存在によつて。

このままでは彼の存在によつて、この学校は無法地帯と化す。
なぜなら、循環が乱れるからだ。

生徒会とは、本当はダストメイトの親玉の集まりなのだから。
平和なんて望むわけがない、弱い奴を好きなようにする、
武力で叩きのめす事に快感を感じる。

いじめをしたくてたまらないのである。

この学校はいじめで成り立つていてる。

いじめられる奴らが下にいるからこそ、この学校は表向きの平和を保てた。

もし、晶がダストメイトを敵にして、いじめの循環を断ち切れば、間違いなく、この学校は終わる。

それはつまり、私の今の生活が消えるというわけである。

「それだけは、許さない」

名森はそう呟いて、拳を握り締めた。

はじめは晶を仲間として取り入れたかったが、それも叶わぬ様だ。潰すしかない、名森は心にそう決めた。

勝負六「教師ｖｓ晶」

「三城君、ちよつと良いかな？」

そう言つてよつてきたのは、伊藤先生だつた。

放課後職員室に呼び出された晶、伊藤先生はすぐこは話しに入らなかつた。

「・・・あの、何か用でしようか？」

「・・・・・・・」

「・・・あの～？」

「・・・・・・・」

「・・・もしも～し」

「あなたは、いじめが嫌いなのよね？」

唐突に口を開く、しかもよくわからない質問に少し苛立つ晶。

「・・・はい、そうですけど?」

「いじめって、どうすればなくなると思つ?」

「いじめている奴に釘をさすしかないでしょ」

「それではダメなのよ」

はつきりと言つ伊藤に、晶は面白いと思つた。

少なくとも他の教師から三城家について話は聞いたはずだ、それでも平氣で話しかけるどころか反論までしてくる。

それほど自信があるということなのだろう、

「では先生、どうすればいいんですか?」

晶は逆に質問をぶつけた。

「簡単よ、殴る相手に殴つたつて仕方ないわ、だからこそ私達には言葉という手段があるので、話し合いで解決するのが一番よ、誰も傷つかないから」

「・・・それだけ?」

「ええ、それだけ、少し気性の荒い人ならそんなきれい事を言つなつて言つけど、理論上、これが正解なのよ」

「ええ、そうですよ、先生の考えは全く間違つてません」「でしょ、だから、あなたも暴力で物事を片付けてはダメよ、いい？」

それで話を終わらせるつもりだったのか、笑いかける伊藤に、晶は平然とこいつ言つた。

「僕は大人と同じ事をしているだけですよ、先生」

笑顔はすぐに崩れて怪訝な表情になつた、

「・・・なに？ あなたはボクサーかプロレスラーにでもなりたいの？」

「いいえ、ルールを忠実に守里斯ボーッマンとして正規のスポーツをしている人達の真似をするなんて失礼ですよ、僕は普通に大人たちが行つている制裁をやつてているだけです」

「・・・何が言いたいの？」

「悪い事をすればそれなりの仕打ちがくる、それを覚えさせるために親は子を殴りますよね」

「それは教育よ、ケンカではないわ」

「あれ？ 僕がケンカしてるとでも言いたいんですか？」

「そうよ、相手が変な言いがかりを付けたから怒つたのでしょ？」

「とんでもない、相手は僕の悪口など一切言つてませんよ」

「じゃあ、あなたのクラスと他のクラスのあの子達を殴つて怪我させたのは何でなの？」

「あいつらが、俺の友達をいじめていたから・・・ですよ」

「・・・そう、でも、だからといって許されるわけないでしょ」

「ですよね、あ・そうだ、先生、僕が殴った不良達にも、ちゃんと説教しましたか？」

「・・・話をするりかかるんじゃありません」

「納得いかないんですよ、僕としては相手が100%悪いと思つて
いるんですから、それに事の発端も相手だし」

「だからって！あなたが手を出していいわけないでしょ！」

突如声を張り上げた伊藤に、周りの教師はビックリした。
とりわけ三城家をしつている教師は顔を青くして職員室から逃げる
ようにして出て行つた。

「・・・ごめんなさい、ただ、あなたみたいに暴力を振つたのに反
省しない人は嫌いなの」

「そうですか、だったら、先生は一生僕を嫌いますね」

「・・・ふざけているの？」

「ふざけているのはどっちですか、先生は何があつても暴力を振る
なという、それは言い返せば『弱い何の罪も無い人間が殴られてい
ても助けるな』って言つてるのと一緒にですよ」

「・・・」

伊藤は固まつた、だが、顔は納得がいかないと言つてゐる。

「・・・そんなの、ただのいい訳でしょ」

「・・・どうやら先生は結局ビビつてゐるそこら辺の教師と同じ
ようですね」

「な、先生をバカにするのは失礼でしょ！」

「バカにされても仕方がないのはあなた達の所為でしょ？殴つて
くる生徒にはビビつて、言う事を聞かない生徒には形だけの説教を
して、助けを求める生徒はことごとく無視をして」

「そ、そんな事！」

「ないつて言えますか？絶対に今までそんなことしなかつたんで
すか？」

「・・・き、教師にも、限界はあるのよ」

「もし、あなたが勉強しか教えない機械なら、僕への口出しが止

めてもらいたい」「

はつきりと、伊藤は言われた。

「・・・・・」

「・・・・では、先生、さよなら」

「まつて！」

去りゆつとする晶を止める伊藤。

「・・・・あなたは、結局、教師は勉強しか教えない、クズだと思うの？」

「全員の教師がクズだなんてさすがに思いませんよ、ただ、あなただけは、例外だと思つていきました」

そつと、晶は職員室を出た。

「なによ！教師を馬鹿にして！あの三城つていう子、最低ね！」

伊藤と同じ同期の教師仲間が声をかけてきた。

「・・・でも、なんだか、当然の事を言われた気がする」

伊藤は落胆しながら言つた。

「仕方ないでしょ、教師が生徒を殴れば『体罰だ』って事で処分だし、口で言つても聞かない奴ばっかだし

「・・・でも、そこを言つ事聞かせるのが、教師なのよね？」

「無理無理、そんな事できるわけないでしょ」

「・・・でも、それじゃあ、本当に私はあの子に口出しできないわ」

「・・・へ？・・・勉強しか教えないとかなんとかだから？」

教師仲間が拍子の抜けた声を出す。

「絶対に暴力を私は認めない、守るためにだからつて殴つて良いなんて思えない！」

伊藤は顔を上げて、前を見た。

「そうよ、ここで私がくじけたら、困るのは三城君だもの
伊藤はやる氣に火をつけて、職員室を出た。

帰り道

「え、それ先生にケンカ売つてきただけですよ」

「うそ？的確な指摘だと思ったんだがな」

「晶君、たしか、伊藤先生って、現文の？」

「ああ、女の人の先生だ」

「・・・たしか、伊藤先生って昔ヤンキーだったんだって」

「・・・ああ、だから殴るなとか言うのか、不良の仲間だから」

「いや、それは違うと思いますよ？」

「どっちにしろ、結局臆病な先公だよ」

晶は純にそう言つと、違う話題を出した。

だが、その間にも、伊藤がある行動をしていた事を、
晶はわかるはずもなかつた。

勝負七「反省室」

伊藤先生に呼び出しをされた次の日。学校ではある話題で持ち切りだった。

「ねえ、反省室が復活したって、本当?」

「そうらしいよ、昨日も学校でタバコを吸っていた生徒全員が反省室に連れて行かれたんだって」

「ええ~、それ何十人もいるから対処しきれないでしょ?」

「それがあ、その先生、メッチャ厳しくて、今のところ何人か改心させたみたいだよ?」

「うそ~」

女子の馬鹿でかい声での会話を聞いて晶は噂の内容を知った。

「ほ~、まじめな先公もいるじゃねえか」

昼休みのチャイムが鳴る。

「晶く~ん、屋上いこ~」

「ああ、亜鹿、今行く」

屋上

「ねえうみちゃん知ってる? 反省室の復活の話」

「うん、だつてもうやしゃが反省室に行つたもん、ね?」

「・・・・おう」

明らかに元気のない様子のやしゃ。

「今朝丁度S.Tの時ケンカをして反省室に連れて行かれて、帰つてきたらこうなつてました」

手短に説明するあゆむ。

「あのやしゃさんが・・・すご~ですね、反省室」

純が体を震わしながら言った。

「まあこれで少しでも不良が減ればいいだろ」

「ええ、兄貴は反省室賛成派なの～？」

「なんだそれは？」

晶がうつみの言つた言葉に首をかしげた。

「今この学校では、反省室賛成派と反対派に分かれているんです」「純が細かく説明してくれる。」

「賛成派は主に気の弱い先生からいじめられる生徒がいて、反対派は専ら不良グループです」

「不良の話なんぞ無視しろ」

「そうもいかないんですよ、なんせ生徒会が圧力をかけてますから「は?なぜ生徒会が入つてくる?」

「なんでも生徒の自由が守られてないとかなんとかで」

「へつ、いじめるのが自由かよ、たいそう勝手な生徒会だぜ」

「言つてくれるねえ君」

ふと誰かが、屋上の入り口から声をかけてきた。

「・・・誰?」

晶が怪訝な顔で言つ、だが、晶以外のメンバーは、硬直していた。

「生徒会副会長、城東幸介だ」

眼鏡をかけたそのインテリ系の男はそう言つて眼鏡を中指で上げる。

「・・・生徒会副会長?・・・ふ〜ん」

物凄く薄い反応の晶、だが、その晶に震える手が掴んできた。

「ああああああきらくん、そそそそんなこといいいいたら

「大丈夫か? おいそこ」の副会長とか言つ眼鏡、亜鹿が怯えているから出でつてくれ

空氣を読まず爆弾発言をする晶、

幸介はそれに少しイラついたのが睨んでくる。

「な、やる気かかのやう！」

うみが前に出て拳を突き出す。

「これ以上近づいたらぶつ殺す！」

「邪魔しないでね、虹橋さん」

冷酷な声で幸介はうみに笑いかけた。
だが、その表情はどす黒かつた。

「また、いやな目に遭いたいの？」

幸介が言葉を発する度に、うみの様子がおかしくなる、震えだす体、かなりの恐怖心があるようだ。

「おい、それ以上うみを怖がらすのは止めもらいたい」

あゆむがうみの肩を抱いて後ろに下がらせる、
だが、あゆむが前に出た瞬間、幸介はいきなり殴りかかってきた。

「！――！」

「てめえ、やつてくれるじゃねえか」

幸介の拳を、晶が掴んでいた。

あゆむは何とか無傷だったが、晶が止めていてくれなかつたら顔面
に入つていただろう。

「・・・面白い、いいで一勝負しませんか？」

「帰れ」

幸介の提案に、晶は間髪をいれずに答えた。

すると幸介は次の瞬間晶の右頬を殴つた。

「ぐつ！」

「あなたに決定権などありませんよ」

幸介がそう言つて次の攻撃に入ろうとしたときだつた。

「止めなさい！」

伊藤先生だった。

「・・・先生ですか、今丁度不良の生徒に僕絡まれていまして幸介が平然と嘘をつく、だが、伊藤は幸介の前に立つて言つた。

「あなた生徒会の子ね？恥ずかしくないの？嘘ついて

「・・・はい？」

面食らう幸介、純達も面食らつていたが、晶だけは笑つていた。

「なんですか先生？勘違いしていませんか？」

「しないわよ、ずっと見てたから、あなたが先に殴つて行つたところと晶君を殴つた所」

「・・・チツ」

舌打ちをする幸介、だが伊藤には聞こえないようしている。

「幸介君だったわね、反省室に来なさい」

伊藤が幸介を反省室に連れて行く、

唖然としている純達だが、晶は平然と弁当をまた食べ始める。

「み、見えてたんだね、伊藤先生が」

「まあ、あの眼鏡にはこういった処置が一番だろ」

そう言つて晶は笑つた。

勝負七「反省室」（後書き）

ぜひ感想ください、まつてますー。

勝負八「女の敵」

「どうだつた？反省室は？」

「最悪でしたよ・・・伊藤先生は無知ですね、ああやうタイプの人
は嫌いです」

生徒会室に戻ってきた幸介を出迎える男子生徒。
彼は副会長の書記、藍同卓。

アイドル顔で女子からの人気が高い。

その所為か、彼の女癖はかなりひどい。

「副会長はそう思つんだ〜、僕は好きだよ、伊藤先生」
「お前の場合は女子全員が好きなんだろうが」

そう言つた幸介、そして、卓が黒い笑みを浮かべた。

「なんだつたら、伊藤先生を手なずけてあげようか？」

いぐり顔はよくとも、その性格は外道で、最低なもののが様だ。

「・・・じゃあ、頼んだ」

幸介は当然だと言わんばかりの態度で、そう言つた。

「思い出すなあ、うみちゃんの時と似てるよ」

「・・・ああ、そう言えばそうだな」

「無知な女の子ほど、傷つき易い子はいないからね
あざ笑う卓、いつもと同じだ、また女の子で遊ぶ。
そう思つていた卓だが・・・。

今回はそもそも行かなかつた・・・。

屋上にまだいる一回、だが、雰囲気は最悪だった。

うみが黙り込んで、あゆむも怒った顔をして、やしゃは少しば氣力を戻したようだが、まだ完全ではない。そして氣まずさに飲み込まれていての亜鹿と純、

「……どうしたお前ら？」

やつと晶が弁当を食べ終わり聞く。

だが、誰も反応しない。

「……よし、やつきの眼鏡野郎をボコボコにして吐かせるか」

立ち上がる晶を必死に止める純と亜鹿、

そんな光景を見て、うみが言った。

「な、なんでもないよ、気にしないで」

「……」

「……」

元気のない笑いをするうみ、案の定、やしゃとあゆむは辛い顔をした。

「……やうか」

晶は氣付いた、JRの話は、うみの前では話せないことこのじとも。

帰り道

「おいあゆむ」

「はー?」

晶が走つて前にいたあゆむに追いつく。

「聞いても良いか?」

「……あまり話したくはありませんが、話すべきだと想つので、いこですよ」

眼鏡を指で上げるあゆむは、歩きながら話した。

「……あの生徒会副会長、城東には、書記が付いているんです、藍同卓、この藍同が最悪な奴なんですよ、容姿端麗なのをいいことに、周りの目をつけた女性を遊びに使うんです、甘い顔をして近づき、自分が遊びたいだけ利用すれば、すぐに捨てる、そして、うみも田を付けられたんですよ」

「……」

「うみもまた藍同の罠に掛かり、遊ばれ、捨てられた」

「……」

「……残念ながら、まだ報復はできていない、なぜなら、うみは今だあの藍同を好きでいるから……」

「……そうか」

晶は物静かに返事をする。

「……晶さん、藍同に手を出すのは危険です、あいつは女性であれば先生にまで手を出す、この学校にいる女性の先生は全員彼の味方と考えた方が良いです、更に言うなら、あいつは女子生徒を巧みに操りこいつの弱みを握ることだって」

「……そんな事はどうだつて良い」

「……晶さん？」

「その藍同とかいうやつは男として最低の行為を犯した、あいつに関わればどうなるだのそんな事を気にする前に、男として、そんな奴をオレは、無視するつもりはない」

「ですが、うみの気持ちだつて考えれば」

「……誰かがそいつを止めなきゃ、うみを含めて、何人もの女の

涙が流れ続ける事になる

「…………」

「女泣かせる奴は、どんなにカッ『よくてもな、最低な男だよ』

久しぶりに、晶の表情が鬼も逃げ出すような恐ろしい顔をしていた。

職員室

「伊藤せんせい」

「・・・藍同くん・・・だつけ?」

伊藤に笑顔で近づく藍同、

「せんせいい、この問題がよくわからないんですよ~」

「え?どれ?」

古典の問題集を差し出して聞く藍同、

伊藤は丁寧に教える。

「へえ~、やつと理解できました~」

「そう、それはよかつたわ」

「・・・せんせい、今度先生の家に行って授業受けに来てくださいですか?」

「だってせんせいの教え方丁寧でわかりやすいですから、では、今週の日曜日に!」

「え?」

「だから伊藤の返事も聞かず職員室を出る、
だが伊藤は別に良いかと思った、
だが、これが藍同の手口だった。

しかし、藍同はこの後、恐ろしい仕打ちがあるなどとは思つても

藍同は伊藤の返事も聞かず職員室を出る、

いなかつた。

昼食時間この時間は、藍同は多くの女子を連れて校庭で女子が作った弁当を食べる。

「卓くんーー」の玉子焼き食べてーー！」

「卓くーん、こいつのおにぎりも食べてよー！」

10人近くの女子が藍同を囲んでくる、

そんなハーレム状態の藍同、

そこへ、内気そうな女子生徒が寄ってきた。

・・・ん？・・ああ、前から好きだとか言ってたあの子か
長髪の少女は手に弁当を持ってハーレムの中に入った。

「あ、あの、卓くん、このお弁当食べてくれるかな？」

ああー、うううう子たくさんいるんだよなー、めんどくさい、
捨てるか

「いやない

藍同は何の躊躇もなく言った。

お弁当を持っていた少女はショックを受けたように、固まる。

「え、でも・・・折角だし、食べて・・・欲しいんだけど」

「いらない、それ捨てて」

「え？」

「君も、名前知らないし、誰？今度から話しかけないでね」

笑顔ではつきり言う藍同、

「でも、でも」

「あなたしつこよー、卓くんは要らなーって言つてるんだから捨
ててきなよ」

女子達まで文句を言つてきた。

女子生徒は体を震わせながら、弁当を落とした。そのまま走り去ろうとした時、

晶がその女子生徒の後ろに立っていた。

「…………なに？誰君？」

「…………お前に言つても無駄だ、教える気はない」

晶は、冷たい表情で言つた。

勝負ハ「女の敵」（後書き）

晶の怒り爆発。

勝負九「晶VS卓」

「はあ？ なに君？」

藍同は苛立つた顔をして晶を睨む、
だが、晶はそんな藍同を無視して、女子生徒を通り過ぎ、落とされた
た弁当を拾つ。

「お前、何人の女を泣かせてきた？」

「・・・はあ？」

「お前は自分の遊びの為に何人の女を泣かせてきた？」

「・・・ああ、なに？ 嫌味？ 僕が女の子に囲まれているのがそん
なに羨ましい？」

「・・・女に囲まれている？ ・・・成る程、確かにたくさんいるな」

「だろ？ 羨ましいかい？ 別に君だつてそんなに悪い顔じやないし、
転校すれば僕と同じくらい周りに女の子がいてくれるぞ」

晶は落ちた弁当を、何も言わず後ろにいる女子生徒に渡した。

「藍同、てめえの周りにいる女子はみんなどんな顔をしていいと思
う？」

「・・・は？」

「泣いてるんだよ

風が吹き、弁当を渡された女子生徒の長髪が風でなびく、
すると、前髪がどいて、女子生徒の表情が見えた。

そして、その顔には涙が流れていた。

藍同の表情が固まる、

な、なんだよ、泣くのかよ？・・・なに？俺の所為か？

「藍同、てめえは一体何人の女を泣かせた？」

「・・・しらねえよ、しらねえよそんな事！・・・そっちが勝手に泣いてるだけだろ！俺の所為じやねえよ！・・・」

「・・・・俺の所為じやねえ？」

「やうだよ！オレは悪くねえ！何で泣くんだよ？俺の前にいるときはいつも笑ってるだろー！」

「・・・んな」ともわかんねのかてめえは？

歩き出す晶、

一步ずつ近づく、

藍同はもぢろん、女子達も動けなかつた。

なぜなら、晶の顔が本当に怒っていたからだ。

「てめえは友達の作り方も、恋人の作り方もわからなことつだな？女と付き合つてのは軽々しいもんじゃねえんだよ、世の中男女平等でけどなあ、たつた一つだけ変わらない約束事があるんだよ」

「…………」

恐怖でおののく藍向に、晶は叫んだ。

「いいか、男はどんな時も、女を守らぬやなんなんだよ」

それだけを言つと、晶はそのまま去りつとした。

「ま、待つて！」

呼び止める声があった。

弁当を持っていた、あの女子生徒だった。

「…………ありがとう」

「じついたしました」

「…………今度、お弁当作つても良いかな？」

「…………じゃ、楽しみにしてるよ」

晶はそつと離つて、歩いて行つた。

女子生徒は、晶の名札を見ていた、だから名前はわかる。

「・・・三城、晶・・くん」

「ひつやう、晶はこの女子生徒を虜にしたようだ。

「み、三城あきらだと？」

藍同が足を震わせながら言つ、
すると、他の周りにいた女子生徒が、立ち上がつた。

「――かっこいい！」

藍同が固まる、

「ひつやう、他の女子生徒も虜にしたようだ。

翌日

「・・・みき、あきら、ファンクラブ？」

屋上で晶が怪訝な顔をして言つ。

「すごい人気ですよ、すでに会員は200人突破です」

純がのんきに言つ、晶はいまだにその事実を受け入れれず困り果て
ていた。

生徒会室

「・・・やめたい？」

城東が言葉を繰り返す、

「はい、本日付で、書記を辞退させてもうこまます」

そう言ひてゐるのさ、藍同だった。

「……どうしてだ？」

「……めんどくさいからさああります」

「……理由はそれだけか？」

「やうですよ、僕は面白い事のあるまつへ行くんです」

「……どうへ行くもつなんだ？」

「三城連合軍……でも作らつかなと」

城東が珍しく驚いている。

「……敵になるのか」

「せうなりますね」

「……宣戦布告か？」

「……多分その必要はないですよ」

藍同は生徒会室を出て行きながら言つた。

「いすれ、この生徒会は、三城くんがぶつ潰しちゃいますよ」

軽く笑つた藍同、それを城東は黙つてみていただけだった。

「……副会長の書記、藍同さんがあめた？」
名森が聞き返す。

「ああ、生徒会もそろそろやばくなってきたな、言いなりだと思つていた殺忍三人衆も、そして藍同も三城側になつた、しかも三城晶のファンクラブまでできた、さすが三城の血縁だぜ」

二学年監視長の男子生徒が溜め息をついて言つ。

「・・・伝説の生徒といわれる平助、かつてこの学校の悪魔といわれていた男、だが、本当はこの学校の秩序を守るため、弱きものを助け生徒会に反逆を起こしていた、裏で勇者といわれる男・・・まあ、もともと教師には反抗的でやりすぎな行動が仇となり正義になれなかつた男ですけどね」

「だが、下手すれば、あの晶とか言う男は正義になるかもしね」

二学年監視長の男子生徒が、静かにそう呟いた。

「今回の藍同書記辞退については、代わりに僕が書記につき、新しい人材を第一学年監視長に緊急任命する事で決まつた、この事態についてそう大きな波紋はないと思う、だが、一応用心してくれ、何があるかわからぬからな」

「はい」「はいはい」

そこで会議は終わつた。

今、この学校に、大きな鬪いが訪れようとしていた、だが、それに感づいているのは生徒会メンバーのみ、

最も重要な人物晶は、

いまだにそんな事を、考えてすらいなかつた。

勝負九「晶▽S卓」（後書き）

感想評価待つてます！

勝負十「夏の思にて」（前書き）

畠の過去、あの夏だけの想い出が今

勝負十「夏の思い出物」

「…………暑い」「

晶が扇子を仰ぎながら不機嫌にそつと語った。

「まあ夏ですからね」

純は当然のようにサラッと答える、

「…………うみちゃんまだ補習なのかな～？」

亜鹿が机に顔を乗せて元気なく言つ。

「やしゃもうみも、まだたっぷり補習がありますよ」

あゆむが窓から外を眺めながら言つた。

「あなた達、怒られているってゆづ自覚ある？..」

伊藤先生が手を震わせながら言つた。

「生徒が立ち入り禁止の屋上に入つたことがまず一つ、その屋上に乱入したからといってその生徒に暴力を振つたことで一つーあなた達は反省しようとする気がないの！？」

「…………ない！」

全員が口をそろえて言つた。

そりやそうだ、屋上にいるのは確かに悪かつたかもしね、だが乱入してきたあの不良どもは純や亜鹿に襲い掛かっていった。

弱いものからやるという外道な考え方の輩を排除して何が悪い？

晶はとりあえず渡された反省文にそう書いた。

それに加えて教師たるものは生徒に敬われる存在であり、それがないのは教師とその保護者の責任にある、と自信満々に長々と論文を書いた。

「先生書けました」

「あら早いわね、それにたくさん書いているみたいだけど・・・」
黙々と読んでいた伊藤は何も言わず晶の論文を真っ一いつに破つた。

「ちょ！なにするんすか？」

「教師に喧嘩を売る論文を平然と書いておきながらその台詞はありえないでしょ？書き直し」

晶は文句を言いながらも心にない謝罪文をさつやと書いた。

「いい？もう屋上に行かないでよ！」

「はいはい」

そう言いながら屋上へ通じる階段を上の晶達、
すかさず伊藤が全員に出席簿で頭を叩いた。

「本当にケンカ売るの好きねあなた達」

「そういう先生も買うの好きですね」

晶には更にもう一発出席簿が落とされた。

「友達を待つのもいいけど、もつと別の場所で大人しく待つてなさい」

伊藤はそつと職員室へ行つた。

「夏休みみんなで何処かいこうよー！」

亜鹿が目を光らせながら言つ。

「亜鹿さん、すでに夏休みは始まつてます」

純がクールに言つ、亜鹿は「あ」と言つて固まつた。

「まあ、遊びに行くのは賛成だな

晶が仕方なく助け舟を出す。

「そういえば、もうすぐ夏祭りでしたね

あゆむが思い出すように言つ。

「お？意外だな、お前らも夏祭りに遊びに行くのか？」

「はい、丁度知り合いの暴走族がいつも仕切つてただで遊ばせてくれるんです」

それはいろんな意味でやばくないか？と思つた純。

「あ～！それつて『猫銀暴走族』でしょ！私の近所のお姉ちゃんが入つているの！」

ねこぎん？意外とかわいい名前だな？とつづける純。

「私毎年行つてるよ！花火だつて見れるから行こいつよーみんなで！」
亞鹿はそう言つて楽しそうに笑つた。

「…………夏…………か」

晶が感慨深い表情で言つた。

その様子はどこか寂しそうだった。

「…………」

あえて声をかけなかつた純、理由は単純に掛けづらかつたからだ。

帰り道

「亞鹿の言つてた夏祭りつていつなんだ？」

「八月の初めにあつたとおもいます」

晶と純は帰る方向が一緒だ、今は一人だけ、純は先程の晶の様子について聞く事にした。

先に歩いている晶の背中に、少し戸惑いながらも話しかける。

「…………さつき、夏祭りの話の後、様子変だつたけど？」

「あ？…………見てたのか…………」

晶が苦笑しながら頭をかく、

「…………いい思い出だけど、苦い思い出でもありますしね
純が鋭く指摘すると、晶は空を見上げて言つた。

「…………ああ、ある意味で、最高の思い出だつたな

晶は歩きながら、純に話した、

自分と親友となる少女の、一夏の思い出を……。

勝負十一 「夏の思い出」（福井や）

かつての畠の思い出が今こゝに思はれぬ・・・。

勝負十一「夏の思い出弐」

それは、やはり、暑い夏の日々が続いている夏休みの時だつた。俺は当然の如く夏休み中も学校に出ていた、補習という無意味なものをやらるために。

「三城……お前、将来何になるつもりだ？」

担任が俺の監視をしながら、そんな事を聞いてきた。

「俺が将来なりたいものを決めるんなら、自由になりたいぜ」

「……そうか、自由か……」

この担任は面白い奴だった。

既に初老のジジイだが、他の先生のように頭ごなしに叱りはしなかつた。

「……三城、今日はまついいだる、三上と城井じょういが待つているからな」

「うーー」

俺はすぐに身支度をして教室を出よつとした。

「おつと、三城、お前に宿題がある」

「……ええ、なんだよもお」

「自由について、考えて來い、答えは自分で見つけてな

「……は？」

「わしからの特別課題だ、がんばれよ～」

本当、よくわからない先生だ。

「わりい、待つたか？」

「遅いよーー体どんだけ馬鹿なのよあんたは！」

いきなり怒鳴り声で俺に食つて掛かつたのは、城井桃花だった。長い黒髪を一つしばりにして、気は強いがかわいい顔をしている。

「まあまあ、桃花もそんなに怒るなよ」

「裕は本当に晶に甘いね！こんなやつかばって楽しいの？」

「いや、楽しいとかそういう意味じゃあ

「そうそう、これは男同士の友情の話だ、お前の入る隙間はない」

俺がそんな冗談を言うと、桃花は真っ赤になつて怒る。

「バカ！バカ！バカ！」

「おいおい、俺が馬鹿なのは今に始まつた事じやねえだろ～」

そんなふざけあいも、今思えば、貴重な体験なんだと、しみじみ思つた。

俺が裕と出合つたのは小学生の時、あいつが転校してきた。俺は当時無口でいつも尖つた眼つきをしていたので、俺に言い寄る奴は誰もいなかつた。

そんな俺に、あいつは話しかけてきた。

二人組みを作ろうと先生が言つたとき、あいつは一番に俺のところへきた。

『組もうよ』

そんな一言が、その時の俺には、なによりも嬉しいものだつた。あいつは誰とでも仲がよかつた。

人に優しくするのが何の躊躇もなくできた。

だからこそ周りの奴らも、はじめは裕と仲が良かつた。

そんな小学生の日々も、中学へあがる頃には、崩れ去つていた。

いじめという名の、俺にとつて最も憎い言葉によつて。

裕はお人よしではあるが、曲がつたことは嫌いだつた。

まるで聖人の様な性格のあいつが、いじめられている奴を見捨てるわけがなかつた。

中学へ入ると、顔ぶれは大体が同じ小学校か近くの小学校の人間だつた。

つまり知り合いばかりなのだが、中には違う人間もいる。

親の転勤によつてこの中学校にいきなり入学する事になつた城井桃花は、まさにそいつた人間だつた。

いじめの標的になるのは、誰とも話さない、親にも先生にも告げ口をしない、そういうた弱い人間が狙われる。桃花はまさにいじめの標的としては最適な性格だつた。

いじめが始まつたのはすぐではなかつた。

初めの頃は周りの女子が桃花に話しかけたりもした。だが、いまいち馴染めなかつた。

あまり喋るのが好きではない桃花は、周りから暗い奴だというレッテルを貼られ、その時からいじめという行為が始まつていた。

俺たちがいじめが行われている事に気付いたのは、校庭で桃花が泣きながら一人で制服を探している場面を偶然にも見てしまつた時だつた。

『城井さん・・・どうしたの?』

『・・・・・』

頑なに何も言おうとしない桃花に、裕は根気よく話しかけた。

『ねえ、城井さん?』

『・・・・・かまわないでよ!あっち行つて!』

顔を真つ赤にしてそう言つた、涙は更に流れていった。

『・・・・・なんだ、喋れるじゃん』

確かに、それまでずっと黙つていた俺がやつと出した台詞が、それだつた。

『・・・・・あ、当たり前でしょ!』

『だつたら最初から喋ろうぜ?』

『見てわかんないの!喋れる状態じゃないでしようが!』

『でも、喋ってるじゃねえか』

『そ、それはあんたが・・・』

『さ、どうせ喋れるんだし、何していったのか言つてみようか』

『・・・制服探していたのよ』

顔をそっぽに向けて、桃花は怒った顔でそう言つていた。

そして、俺は言った。

『・・・じゃ、俺たちも探してやるとするか』

なぜ、制服を校庭で探しているのか、そんな質問はしなかつた。

ただ、俺達はたわいもない会話をして制服を探していた。

『なあなあ、俺思うんだけどよ、なんで英語は必修教科なんだ?』

『え? ・・・なんでつて言われても』

『お前はどう思つ?』

『・・・・・ わあ? ・・・あと、呼ぶ時はお前じやなくて名前で呼んでよね』

『英語なんて日本に住んでいる時日常的に使わないだろ? だつたら音楽とか家庭科と同じ部類じやねえかよ』

『無視すんな!』

『でもさあ、これから時代、案外英語が必要になるかもしぬないだろ?』

『そつか? でもよお、だとしても通訳士という仕事があるんだから別に一般人が学ぶ必要ないと思うんだよなあ・・・だろ? 桃花』

『だから名前で・・・あれ?』

『なんだ? ちゃんと名前で呼んだぞ?』

見る見る赤くなつていく顔。

『・・・・・ ば! バカ!』

少し涙目だった桃花、それを見て、俺は何か共感できるものがあつた。

他人の優しさを知らなかつた人間が、ふとそれを感じると、感動は大きくなる。

かつての、俺が裕からもらつたこの感動を、
今度は、俺が桃花に与えたのだと思った。

それからとこりもの、この三人で行動する事が多くなつた。
そうなつてから、しばらくは桃花へのいじめのなかつた。
中学校時代を振り返ると、この三人でいた記憶しかない事に気付く。
だが、別にそれでいいと思つた。
俺にとっては、十分すぎる最高の思い出なのだから。

そして、中学最後の、夏休みが来たのだった。

勝負十一「夏の思ひ出紙」（前書き）

初恋、大切にしますか？

勝負十一「夏の思い出」

近所で開かれていた夏祭り。

夏の暑い夜の中、人ごみと出店で賑わっている神社、そこに、オレと桃花と裕の三人がいた。

「よし、金魚すくいやろうぜ金魚すくい」

「え？ 射的がいい！」

「うるせえ！ まずは金魚すくいだつて世界の法律で決まっているんだよ！」

「馬鹿じゃないの？ そんな法律なんかないわよ！」

オレは相変わらず桃花とそんな言い合いをしていた。

「まあまあ、まずは散策して日付いたお店で遊べばいいだろ？」

裕が仲裁に入つてようやくいがみ合いは終わる。

「桃花の浴衣かわいいよ、すっごく似合つてる」

裕が桃花の浴衣姿を褒める。

「本当？ ありがとう！」

嬉しそうに言う桃花。

「ついでに性格もかわいくなるといいんだけどな

オレがそんな小言を言うと、また桃花は怒った。

「バカ！ あんたにデリカシーってものはないの！？」

「お、リンク飴うまそうだな」

桃花はオレに右ストレートをおみまいした。

「いこ！ 裕！ こんなバカほつといて！」

「大丈夫か？ 晶」

「鼻血を出している親友が大丈夫なわけないだろ？」

そう言いつと、裕は笑つた。

夏祭りは本当に楽しかつた。

だが、少し寂しい感じがした。

中学最後の夏休みだからだつた。

高校へは、みんなバラバラになる。

裕は頭がよかつたから国立の進学校を目標していた。桃花は元々中学の間だけこっちに来るといつ予定だつたので、高校はこことは違う県になる。

オレはとこつと、特に目標もなく生きていた。

「ああ～、思いつきり楽しんだな」

オレは金魚を五匹捕まえれて満足していた。

「晶は本当金魚すくい得意だね」

「まあな、器用なんだよ」

そう言つたオレに、裕はそうかな?と言つた。

「晶つて・・・人を救う力があるからさ・・・だから金魚すくいも得意なのかもね」

「・・・は?なんだそれ?」

「さあね・・・何となくそう思つただけ」

裕はそう言つて笑つた。

「ちよつとー、私を差し置いて何の話をしていたの?」

桃花が射的で取つたぬいぐるみを持ちながら聞いてきた。

「ああ、オレの金魚すくいのテクニックは素晴らしいと裕が言つもんだからさ」

「言つた覚えないんだけど?」

「ふ～んだ、私の射的のテクニックに比べたらまだまよそう言つて桃花は少し笑つた後、ふと、悲しい顔になつた。

「・・・今日で・・・最後だね」

桃花は、両腕でぬいぐるみを強く抱きしめていた。

「……おいおい、そりや夏祭りは終わっちゃうけどそこまで残念がる事じゃないだろ？」

茶化すオレに、桃花はいつものように、バカとは言つてくれなかつた。

「……実はさ、一人に……言つてなかつたことがあつてね」

「……なに？」

裕が優しく聞いた。

「……私さ、前の学校では、友達たくさんいたんだけど……こつち来てから、一人になつちゃつてさ……すごく、寂しかつた」

少しずつ話す桃花、それを、俺達は黙つて聞いていた。

「でも……でも、さ……裕も……晶も、友達になつてくれてさ……私、本当に嬉しかつた」

震える声で、桃花は必死に話した。

「私さ……二人と離れるのが……本当に辛いけど……二人との思いでは……絶対に忘れないから……」

「……僕達も、忘れないよ」

裕は、優しくそう言つた。

「……ゴメンね、明日……もう、行かなくちゃダメなの……もう、一人には……会えなくて……でも……言うのが辛くて……ずっと、三人で……一緒にいたかつたけど、いられないから……本当、ゴメン」

泣いている桃花に、オレは優しく頭をなでてやつた。

「謝るなよ・・・それに、一度と会えないわけじゃねえだろ?・・・また三人で会える時が来るぞ・・・だから、泣くなよ?」

「・・・・バカ」

そう言つた桃花の顔は、涙で溢れていたが、笑顔だった。

「じゃあ、晶、桃花をしつかり送つてあげてよ」

「わかつてるよ、泣きむしな女の子を一人にさせるわけないだろ?・・・

「な!泣きむしとは何よ!バカ!」

すっかり日も暮れて、祭りも終わっていた。

人ごみが無くスッキリした道を、オレと桃花が歩いていた。

「にしても、明日とは急だな」

「うん・・・本当は一ヶ月前から聞かされていたんだけどね」

「・・・ま、言い出しにくいのは当然か、お前もかわいい所あるな

「今頃気付いたの?遅いわね」

「うん、その返事はかわいくないな」

「バカ!素直な女の子はかわいいでしょ?」

「見栄つ張りで強がつてゐるワリには、やつぱり泣きむしな女の子の方がかわいいな」

「なにそれ?誰の事よ?」

「お前だよお前」

「え?」

本気で顔を赤くさせた桃花、オレは自分でなぜそんな事を言つたのか、不思議だつた。
ただ、何となく、本当に少しおもひ思つていたから、そう言つたんだと思う。

「……ばか！変な事言つな！」

「べつに～？沈んでいる桃花ちゃんを元氣付けよつと思つましてね」

「……ねえ、晶」

ふと、桃花は、赤い顔のまま、聞いてきた。

「……私の事、好き？」

初めて、そんな質問をされた。

「……ふむ、それは一体どんな冗談だ？」

「ふざけないで！真剣に答えてよ！」

桃花は変わらず、顔を赤くさせて言つた。

「私は！……晶の事、好き……だよ……初めて、会つた時も、いつも会つ時も、一番自分らしく喋れた相手が……晶だったし……晶といふと、楽しいし……だから、好きなの……晶は、私の事……嫌い？」

「……嫌いなわけ……ないだろ」

オレは、珍しく顔を真っ赤にさせて、そう言つた。
すごく、照れくさくて、歯がゆい感じだつた。
どうすればいいのかもわからなかつたが、桃花を確かにオレは好きだつた。

「……本当？」

「・・・ああ、本当だ」

「本当の本当？」

「本当の本当」

桃花はオレに一気に近づいて、顔を急接近させながら聞いた。

「・・・じゃあその印に」

桃花はオレの頬にキスをした。

「・・・・本当、好きだったから・・・バイバイ」

桃花はやつ言い、走って行った。

「・・・・バーカ」

オレは、あいつの口癖を言っていた。

多分、桃花はもうオレの事を好きではない。

それは最後の台詞からもわかることだった。

今はあいつが既にどこに住んでいるかなど、もうひんとも知らない。

あいつと連絡を取る事すらできない。

それでも・・・あいつとの記憶は、今でも大切にしている。

なんせ、オレの初恋だから。

勝負十一「夏の思ひ出紙」（後編）

わざわざ遅に更新ですけど・・・がんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7928d/>

I Z I M E

2010年10月14日13時50分発行